第13章

女性アーカイブセンターの展示事業における新たな試み

山崎　裕子

1　はじめに

国立女性教育会館（以下、NWEC）の本館3階には女性アーカイブセンター（以下、センター）が、1階には女性アーカイブセンター展示室（以下、展示室）があり、展示室では年間を通して資料展示を行っている。室内は決して広くないが、NWECとしての情報発信のあり方を示す一つの手段として重要な役割をはたしている。本稿では、展示室開設の経緯について触れた後、展示室における展示事業の概略を述べ、今後の課題について検討する。

2　所蔵展示

センターは2008年6月に開始され、男女共同参画社会の形成に顕著な業績を残した女性、全国的な女性団体や、女性教育・男女共同参画施策等に関する資料を収集している。著作権・個人情報・肖像権等に抵触しないものについては原資料のデジタル画像をインターネットで公開しているが、原資料そのものは閉架式書庫で保管し、請求に応じて利用に供するシステムを採っている。

展示室は同年10月に開設され、1年のうちほぼ前半を「所蔵展示」に、後

半を「企画展示」に使用している。そのうち、原資料を閉架式書庫から出して展示する「所蔵展示」は、原資料の存在を来館者に広く知ってもらうために必要な事業である。

表1　女性アーカイブセンター所蔵展示一覧

平成21年度	・「和田典子資料」 ・中国女文字の世界
平成22年度	・「塩ハマ子・春秋会コレクション」 ・第4回世界女性会議（北京会議）資料
平成23年度	・平塚らいてうに関する資料（「奥むめおコレクション」および「全国婦人新聞取材写真コレクション」より） ・「九重年支子資料」
平成24年度	・市川房枝に関する資料（「全国婦人新聞社取材写真コレクション」より） ・「塩ハマ子・春秋会コレクション」 ・「稲取婦人学級資料」
平成25年度	・「家庭科の男女必修から20年」に関する資料（「和田典子資料」および「全国婦人新聞社取材写真コレクション」より）
平成26年度	・「喜美子さんちの家計簿」

センターの資料は、日本の近現代における女性史、女性関連団体・機関、社会活動に尽力した女性たちに縁のあるものが多い。資料に関係する個人・団体の業績や来歴について、ある程度予備知識を持たなければその価値を知ることが難しいものがほとんどであり、一般的にその名がよく知られている個人・団体の資料はごく少ない（表1）。そのような条件の中、センターでは少しでも来場者数を増やすために工夫している。

①視覚に訴えかける資料の選定

他機関のアーカイブ資料にも当てはまることだが、センターの資料は文書が多く、人目を惹く外見を兼ね備えているとは言い難い。それを補うために過去の展示では、表紙や本文にカラー印刷が使われている文書類、写真、日用品等の紙資料以外のものも多く用いている。

②関連ビデオの上映

室内で展示内容に関係のあるビデオをリピート再生し、展示室外にいる来

図１　平成 23 年度所蔵展示より「九重年支子資料」

図２　平成 24 年度所蔵展示より「市川房枝に関する資料」

館者に音声や映像で展示室の存在を気づいてもらい、室内へ誘導する一助となるようにしている。

平成26年度所蔵展示「喜美子さんちの家計簿」

所蔵展示の取組例として、平成26年度所蔵展示「喜美子さんちの家計簿」（2015年2月3日～7月24日）について述べたい。

センター資料の一つに「中村喜美子資料」がある。中村喜美子氏（1925－）は神奈川県在住の主婦で、1954年の結婚当初から現在までつけ続けている家計簿のうち56年分（1954－2009年）とその関連資料を、2010年にセンターに寄贈した。横浜生協（現・ユーコープ）組合員として「生協の家計簿」の編纂や食品の開発などに多大な貢献をした同氏の家計簿をダイジェストで紹介することによって、半世紀の間に一個人の家庭生活や社会生活が非常に大きく変化したことを来場者に実感してもらうよう意図した。

所蔵展示では例年、企画展示と異なりプロの展示デザイナー（後述）にアドバイスを依頼していない。そのため、所蔵展示2ヵ月前に行われたセンター主催の「女性情報アーキビスト養成研修」実技コースの「アーカイブ展示の手法」という講座で、講師と受講者全員で所蔵展示の方向性についてワークショップ形式で検討してもらう時間を設け、その場で得た意見を実際の展示に活かした。例えば家計簿全点の現物展示である。56年分の蓄積を一目で

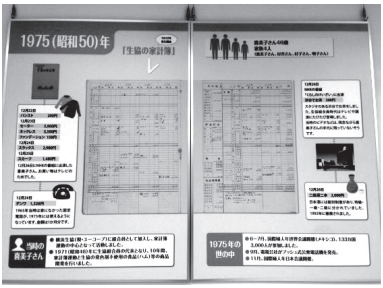
図３　家計簿現物 56 年分の展示

実感することが目的だったが、家計簿はいずれも薄く、予想よりボリューム感が不足した。そのため実際の展示では、数十年分の家計簿であることをキャプションで簡潔に説明し、空いたスペースは小道具を使ってレイアウトした（図3）。

また、「アーカイブ展示の手法」講師からは従来の展示パネルは文字数が多いとの指摘があったため、「喜美子さんちの家計簿」ではパネルの文字数を極力抑え、図版を増やしてより視覚的に理解できるようにした。

図４　平成 25 年度所蔵展示「家庭科の男女必修から 20 年」

図５　平成 26 年度所蔵展示「喜美子さんちの家計簿」



3　企画展示

NWECは関係府省や各種機関との幅広い連携を使命の一つとしている。センターもそれに基づき、2008年度以降は毎年夏から冬にかけて、複数の他機関から資料を借用して企画展示を実施している（表2）。特にNWEC第3期中期計画（2011－2015年度）においては、「女性アーカイブの企画展を中期目標期間中に5機関以上と連携して実施する」ことがセンターの目標の一つとして明確に定められている。

表２　女性アーカイブセンター企画展示一覧（カッコ内は共催・協力機関）

平成20年度	女性の高等教育の黎明 （実践女子大学、女子栄養大学、津田塾大学、東京女子医科大学、日本女子体育大学）
平成21年度	女性科学者の誕生 （お茶の水女子大学ジェンダー研究センター、お茶の水女子大学附属図書館、東京大学柏図書館、東京大学大学院理学系研究科附属植物園、東北大学史料館、日本女子大学成瀬記念館、北海道大学大学文書館、独立行政法人理化学研究所）
平成22年度	女性の実業教育のはじまり （共立女子大学、女子美術大学、嘉悦大学、文京学院大学）
平成23年度	化学と歩む （お茶の水女子大学ジェンダー研究センター、東京大学駒場図書館、東邦大学、日本化学会、明星大学図書館、ライオン（株）、名古屋大学物質科学国際研究センター）
平成24年度	建築と歩む （UIFA　JAPON パイオニア展企画委員会、（株）後藤眞理子デザイン事務所、埼玉大学図書館、女子栄養大学図書館、女性就業支援センター、東京大学生産技術研究所図書室、長谷川逸子・建築計画工房（株）、空気調和・衛生工学会、東京大学工学・情報理工学図書館、早稲田大学大学史資料センター）
平成25年度	音楽と歩む （教育史料出版会、女性と音楽研究フォーラム、東京藝術大学附属図書館、東京大学大学院情報学環・学際情報学府図書室、早稲田大学坪内博士記念演劇博物館、国立音楽大学附属図書館、サントリーホール、知られざる作品を広める会、明治学院大学図書館付属日本近代音楽館）
平成26年度	映画と歩む （岩波ホール、川喜多記念映画文化財団、京都文化博物館、小林正樹監督遺託業務世話人会・芸游会、（株）シグロ、（株）自由工房、東京国立近代美術館フィルムセンター、日本女性学習財団、パド・ウィメンズ・オフィス、婦人之友社）
平成27年度	宇宙をめざす （（株）ALE、宇宙航空研究開発機構（JAXA）、NEC、キヤノン、国立天文台、白井市文化センタープラネタリウム）

当初の2回分は「チャレンジした女性たち」をテーマとし、かつて教育・研究分野で活躍した女性たちを取り上げた。それ以降は「チャレンジした女性たちからチャレンジする女性たちへ」を共通テーマに、毎年ある特定の分野を取り上げ、その分野でパイオニアの役割を果たした女性と、現在も活躍中の女性の双方を展示対象としている。

所蔵展示と異なる特徴は次の通りである。

①展示デザイナーの招聘

展示デザインの専門家に、展示室のディスプレイ等を有料で依頼する。

②解説の作成

展示で取り上げた個人について、一人につきA4サイズで1～2枚ずつ「ファクトシート」という名称の解説を作成する。解説の執筆は、執筆対象が「パイオニア」の場合は当該分野に詳しい有識者に、「現在活躍中」の女性の場合は対象となる本人に依頼する。ファクトシートは展示室前のパンフレットスタンドに置いて来場者に無料で配布し、国立女性教育会館リポジトリでも公開する。

③連動企画の実施

その時々のテーマに合わせて、音楽家による演奏会、映画監督によるトークつきの上映会、関係者による講演会などを実施する。

平成27年度企画展示「宇宙をめざす」

所蔵展示の取組例として、「宇宙をめざす」(2015年7月31日～12月20日)について述べる。

例年の枠組に沿って、平成27(2015)年度も特定の分野を扱うこととし、テーマを宇宙研究開発に定めた。例年通り進めたのは以下の作業である。

①展示構成

特定の分野における「パイオニア」と「現在活躍中」の女性たちをそれぞれ取り上げた。

②展示デザイナーの招聘

図６　平成 26 年度所蔵展示「喜美子さんちの家計簿」展示室外から室内を見た様子

図７　平成 27 年度企画展示「宇宙をめざす」展示室外から室内を見た様子

センターに立ち上げ時から関与している、空間演出コンサルタントの尼川ゆら氏に展示デザインを依頼した。「喜美子さんちの家計簿」展では、通路から展示室を眺めるだけで入室しないまま立ち去る来館者が少なくなかったことを報告したところ、尼川氏から「外から内部がよく見えるレイアウトの場合（図6)、見る人は展示室に入らなくても室内の様子をおおむね理解したつもりになる。外から全容を把握し難いレイアウトの方が様子を覗きたくなる」との助言を得た。さらに､「宇宙をめざす」では天体写真の大版スクリーンを天井から吊り下げたり、ガラス壁面にステンドグラス風の切り絵を貼付したりする等の提案もあり、あえて室外からは展示室の全貌が覗けないよう工夫が施された（図7)。

今回の企画展示における新たな試みは次の４点である。

①監修者による指導

従来の企画展示でも有識者に適宜助言や協力を仰いだが、2015年度は大朝由美子埼玉大学准教授に監修を依頼し、展示の構成や対象者の選定について一から指導を受けた。大朝准教授に依頼した理由としては、天文学の数少ない女性研究者であること、NWECの所在地と同じ埼玉県にある大学の所属であること、NWECが毎年主催している「女子中高生夏の学校」で学生とともに天体観望会の指導を行っていることなどが挙げられる。

②インタビュー集の製作

ファクトシートは文字通り1枚ものの解説で、数種類作成して置いておけば利用者がほしい解説だけ持ち帰れる形式のものであるが、今までの提供方法は、1回の展示で作成したすべてのファクトシートを1つのクリアファイルにまとめて入れ、パンフレットスタンドに置くというものだった。スタンドの前を通りかかった時の来場者の行動を観察したところ、チラシ置き場からチラシを1枚ずつ取っていく感覚で、クリアファイルに入っている複数枚のファクトシートから1枚目のみを取り出して持ち帰る様子がしばしば見られた。そのため、2015年度は従来のファクトシートに代わって1冊のパンフレットを製作し、関連資料をまとめて持ち帰れるようにした。また、展示対象とする人物本人に直接会って考えを聞き出したいという思いがあったため、「パイオニア」と「現在活躍中」の女性計7名に対しては解説の執筆を依頼せず、展示担当職員3名によるインタビューを行い、全24ページのパンフレットに纏めた。特に編集業務の経験を持っていなかったが、インタビューの文字起こし・編集作業も併せて行った。

③ギャラリートークの実施

企画展示の連動企画として9月に向井万起男氏による講演会を行い、終了後、筆者による約30分のギャラリートークを展示室にて実施した。ギャラリートークは、博物館や美術館等において学芸員や研究者が一般来場者とともに館内を歩きながら解説を行うものである。今回は講演会の場で希望者を募り、来場者72名のうち約30名の参加を得た。

④NWECボランティアへの説明

2015年9月4日、筆者は平成27年度NWECボランティア連絡会議（第2回）にて、ボランティアスタッフに対して情報課における展示事業の概略を解説し、その後展示室で「宇宙をめざす」の展示説明を行った。同会議は長期にわたって年3回開催されているが、展示事業の説明に時間を割いたのは初めてである。

ボランティアスタッフは、NWEC利用者を対象とした会館の見学案内を

行う際に展示室をコースに組み入れているが、いったん展示室前で足を止めるものの入室せず、そのまま利用者とともに次の案内地点へ移動するケースが見られた。そのためボランティアスタッフに対して、見学案内の際は利用者を展示室内に誘導するよう依頼した。その成果があったのか、毎年9月の来場者数は2013年の1,401人が最高だったが、2015年9月の来場者数はそれを上回る1,923人を記録した。

4　今後の課題

展示事業における今後の課題について、事業全体、所蔵展示、企画展示の3点に分けて述べたい。

展示事業全体

事業全体の課題をハードとソフトに分けて検討する。

・ハード

ハードの課題は展示室である。展示室は2008年の開設から約7年経ったところで、大規模改装にはまだ早い時期だが、将来改装の予算が確保できた場合、主にレイアウトについて見直しが必要と思われる。その際の課題と考えられる点をいくつか挙げる。

① 展示室の色調

展示室は、通路に面した北側の壁面は全面ガラスだが、それ以外の壁面・天井・展示ケース等の什器はほぼ白色で統一されており、床面もクリーム色である。発想としてはホワイト・キューブ、つまり直線的に仕切られた白い壁で構成され、近・現代美術館で広く採用されている展示手法にやや近い。この手法は、装飾的な要素を排除したニュートラルな空間に十分な余白を取って美術品を配置し、意識を集中させて鑑賞するには有効であるが、センターの主な所蔵品である文書やモノクロ写真等のように、美術品鑑賞とは別の観点から情報を読み取る必要のある資料を展示する場合、必ずしも有効と

図８　平成 25 年度企画展示「音楽と歩む」展示室内

図９　平成 27 年度企画展示「宇宙をめざす」展示室内

は限らず、ともすると展示室全体が無機質に見えるおそれがある。そこで室内を白いキャンバスと捉え、色付きの布を吊るす、展示ケース内に色紙を敷く、壁面と展示パネルの間に布や写真を垂らす等の方法を使って、室内の色調にコントラストがつくようにしている（図8、9）。

抜本的な対策としては、壁面・天井・展示ケースを今までと違う色調や質感の素材に作り替える方法がある。ただしその場合、改装後の雰囲気がある程度固定されてしまい、展示の内容に合わせて室内全体の色調を替えることが難しくなる。

② 展示ケース

展示室内の展示ケース6点はいずれも壁面に固定されていて動かすことができない。展示ケースに可動性を持たせればレイアウトの幅を広げることが可能である。

③ 壁面

コンクリートの壁面は、ピクチャーレールを使って展示パネルを吊り下げることができるが、展示物を直接掲示したり什器を取り付けたりといった他の用途に使うことは難しい。しかし、壁面自体の改装が将来的に困難であっても、展示ケースが可動式であれば、壁面に展示用ボードを近接させてパネル以外の品を展示する、ケース以外の大きな展示物を設置する、などの対応が可能になる。

・ソフト

ソフト面での課題としては以下が考えられる。

① 展示企画

現在、年間計画は所蔵展示と企画展示の二本立てとし、必要に応じて短期間の特別展示を実施しているが、常設展示は特に実施していない。今後はセンターの歴史や機能を紹介する常設展示の可能性も探りたい。展示場所の候補としては、本館2階の女性教育情報センター前のスペースが考えられる。該当スペースの名称は、本館の案内板等では「展示ロビー」となっているが、実際はイベントのチラシや寄贈図書の書架が置いてあるラウンジとして機能している。ラウンジとしての機能は残しつつ、本来の目的である展示ロビーとしての機能も持たせることを近い将来検討したい。

② ボランティア対応

ボランティアスタッフは、NWEC利用者に対して見学案内を行う際、テンプレートの解説文を用いて口頭で説明する。その解説文に展示室自体の説明は含まれているが、所蔵展示・企画展示の内容に関する説明は今までなかった。今後は展示入れ替えの都度、担当職員が説明文を作成することを検討している。また、ボランティア連絡会議等の場を利用し、見学案内を担当するボランティアスタッフに対して、担当職員が展示の入れ替えごとに直接説明をする機会も作っていきたい。

所蔵展示

NWECの来館者は各地の女性関連施設職員や研究者だけでなく、中高年の趣味サークルや学校の部活動等の使用目的で来館する人々も非常に多い。そのような来館者は女性史について特に知識や関心を持っていないが、そうした人々が展示室に関心を持って入室するよう、そして入室後もごく短い間と想定される滞在時間のうちに少しでも展示物に関心を寄せてもらうよう、担当職員の努力が一層求められる。

現在は展示物として視覚に訴えかける資料の選定を心がけているが、結果

的に、他の資料と比較して相対的に見栄えのする一部のコレクションが繰り返し使われる傾向にある。今後は見た目が地味な文書であっても、解説や展示レイアウト等によって総合的に視覚的効果をもたらすよう工夫し、地味な文書の持つ歴史的社会的価値をより明快に紹介できるよう心がけることも必要である。

そのためには資料の持つ歴史的背景をわかりやすく簡潔に説明することが欠かせない。展示パネルの文字情報は平均200字前後が最も読みやすい。また、展示主催者が想定した順番で実際に利用者が見るという保証はないため、各資料の解説はその解説単独で完結させる必要がある。しかしセンターの展示室は狭く、展示パネルの数も少ない。明快な説明をするには展示パネル以外のツールを用いることも非常に有効である。例えば従来の所蔵展示ではファクトシートなどの持ち帰り可能な紙資料を作成してこなかったが、今後は企画展示と同様に作成する手段が考えられる。

企画展示

ある特定の分野におけるパイオニアの女性と現在活躍中の女性を展示対象とするコンセプトが数年継続されているが、他に適切なコンセプトがあれば転換してもよい。解説資料として、2015年度はインタビュー集を製作したが、今後はインタビュー集の継続有無、提供方法を見直した上でのファクトシート復活の有無、展示目録の整備等について検討が必要である。

5　おわりに

展示室で充実した展示を行うためには、すでに所蔵している資料の適切な保存だけでなく新規資料の収集・整理・保存を並行して継続していくことや、新規の連携機関を開拓していくことが必要である。現在、センターのスタッフは常勤職員（女性教育情報センターと兼任）と非常勤職員で構成されており、専任の常勤職員がいないため、業務がやや追いついていない状況にあるが、

小規模とはいえ専用の展示室を持っている恵まれた環境を一層活用できるよう努めていきたい。

参考文献

吉田憲司 2011『博物館概論改訂新版』放送大学教育振興会
黒沢浩 2014『博物館展示論』講談社
デビッド・ディーン 2004『美術館・博物館の展示』丸善出版

（やまざき・ひろこ　国立女性教育会館情報課情報係長（併）専門職員）